第３回子どもの読書活動推進研修会の開催にあたって
子どもの読書環境はこのままでよいのか

1　今回は、斯道の第一人者であるお二人の講師をお招きすることができた。

鳴門教育大学名誉教授　佐々木宏子氏

横浜市立大学教授　朝比奈大作氏

両氏には講演や講座の時間をたっぷりとっていただいているので、またとないよい機会にぜひ多くのことを学んでいただきたい。

まず、われわれが関わっている子どもの読書環境の現状はどうなのかをチェックしよう。①子どもの身近に本があり、子どもは本に慣れ親しんでいるか。②子どもたちの周りに本好きな大人がいて子どもに読む機会を多く設け、本に親しみ、読む楽しさ、充実感を味わうようにしているか。③司書教諭、学校司書、司書、図書館ボランティアは協働しているか。④学校図書館、公立図書館は子どもの読書活動に本腰を入れているか。

「すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない」（子どもの読書活動の推進に関する法律第二条）ために、われわれはどんなことに力を入れて取り組んでいるか。悩みや困難点、直面している課題などを出し合いながら研修を深めよう。

2　本会の第１回研修会（2004年７月）で山月美江子氏（挾間町立図書館長）は、講演の中で「大分県こども読書活動推進計画」の策定に関わった一人として概略次のように述べている。

「大分県こども読書活動推進計画」の内容にはまだまだ問題点はあるが、何よりもこの推進計画を知り、読み、検討し、わが市町村は子どもの読書推進にどこから手をつけていくかを考え、実現に向けて動き始めない限り、計画は絵に描いた餅に終わってしまう。子どもの読書活動に関わっている人たちはおとなし過ぎると思う。子どもの豊かな成長のために読書を欠くことはできないのに、子どもの読書環境は極めて不十分である。学校図書館に人はいないし、本は古くて少ない現実を見逃してはならない。

たとえば、「学校図書館に学校司書を」と真剣に声を上げ、ねばり強く当局に要望しているのだろうか。行政を動かすほどの熱意を伝えているのだろうか。子ども達と日々向き合っているわれわれが声を上げない限り、現状を変えることはできない。手をこまねいていては何もできない。

山月氏のことばをしっかり受け止めたい。そして、子どもの読書活動推進に関わるわれわれは、自分たちの地域で、学校や園で、図書館でどのような課題に取り組んでいるのか、現状はどうなのか、知恵を出し合い創意工夫しているか、協働は進んでいるか、何か欠けていることはないかなどを出し合って、子どもの読書活動を推進しよう。この際「大分県こども読書活動推進計画」を細かく読み返してみよう。